
± F 1 5

弓枝 秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

±F15

【Nコード】

N8446J

【作者名】

弓枝 秋

【あらすじ】

食べ物の恨みは恐ろしい。

妻の嫉妬も恐ろしい。

義弟の笑顔も、たまに恐ろしい。

そんな、普通なようで普通でない露系日本人のジール一家が繰り広げるスラップスティックコメディ。

一話完結型です。

ハロウィーン編

ジール家に朝が訪れた。

「サルトー、ネクタイどこ？」

この家では、母親は滅多に家事をしない。さらに、父も兄もそう言った能力とは無縁の存在だったので、末弟でA型のサルトムスキーがいつも文句を言いながらも、テキパキとこなしていく。

「そこにあるだろ」

朝食のベーコンエッグを作りながら、不機嫌そうにあごでアイロン台を指した。昨日の夜、眠気と戦いながらアイロンがけをしたのだった。

2

「あー、あつたあつた。あ、お茶ちょうだい。ぬるめで」

横柄な態度で、兄がテーブルにつく。

（お前は嫌なファミレスの客か）

睨みながら、答えるサルトムスキー。

「テーブルにおいてあるのが見えねえのか、お前は」

「お、流石は俺の弟。用意がいいね」

（用意がいいね、じゃねーっつの）

心の中でブツブツ文句を言いながら、今日も見事な半熟ベーコン

エッグを作り上げる。

兄はしばらく黙って与えられた食事を食べていたが、ふとカレンダーを眺めた。

「今日は、十月三十一日か。ってことは、ハロウィーンじゃん。サルト」

「自分でしろ」

「んだよ、機嫌悪いなあ」

「当たり前だ。サルトサルトとやかましいわ、この生活無能力者！俺はサルじゃねえし、テメエの妻でもねえ！」

「そうだなあ、義兄弟でも結婚できりゃあ、有り難いんだけどなあ」
「……………」

妙な寒気がして、サルトの肌には鳥肌が立っていた。

「男同士だぞ？」

「オランダじゃ、同性婚は法的に認められてるんだぞ」

知識を自慢するかのように冗談（と信じたい）を言う兄に、サルトは超絶に嫌そうな顔をした。

「問題は法律よりお前の神経だ、この変態っ」

「………… 本気にするなよ」

無言でサルトはまだ熱湯の入っている急須を手取る。次に何が起こるかを予想して、兄は戦慄した。

「ちよつ。だああ、わかった、わかったから！ 頼むから急須を投げるなよ」

「わかったなら、自分のことは自分でやれ！ ったく…………」

「はいはい。あ、サルト。晩飯はアジの開きに」
「早よ会社行かんかいッ！」

（１０時間後）

「とか何とか言っつて、アジを買っている自分が悲しい」

学校も終わり、サルトムスキーは近所のスーパーマーケットにいた。

（しかも奥様方と混ざって買い物をする事になれてしまった自分も悲しいやな……）

アジをかごに入れたあと、お魚コーナーを通り過ぎると、近くのラジカセから軽快な音楽が流れてきた。

ハッピーハロウィン、ハッピーハロウィン、お菓子をくれなきやいたずらするぞ。

軽快な割に、言ってることが脅迫なのはおいといて。

「あー、ハロウィーンか」

朝の兄との会話を思い出して、サルトはお菓子コーナーと野菜コーナーの間で足が止まった。

（そっぴやハロウィンなんて祝ったことねーな。ここ日本だし）

兄も弟もロシア人とのハーフだが、生まれたときから日本に住んでいたため、ロシアらしさなど外見にしか出ていない。

奇妙な感慨が湧いてきて、サルトは一人、ジャック・オー・ランタンとかいうカボチャ提灯のレプリカを見つめていた。

（カボチャ、か……）

（2時間後）

「何だこれは」

帰宅後、兄はテーブルの上に狂気を見た。

「見りゃわかるだろ。今日はハロウィーンだろうが」

この上なくご機嫌な姿の弟を見て、兄は目眩を覚えたとか覚えなかったとか。

「……………サルト、お前」

「ごたごた言うな。可愛い素敵な弟様が精魂込めて作ったんだ、食え」

火花が散りそうで散らないにらみ合いのすぐ横で、何事もないように食事を始める夫婦。

『いただきまーす』

「ちょっと、そこのお二人様、なに平凡な家庭装って食ってんですか。ってか、問題はそこじゃねえ、サルト！」

「はいはい」

「お前、今日の晩飯はアジの開きにしてくれつつただろーがあああっ！　なんで全部カボチャなんだようおっ！！」

きらりとした汗をぬぐいながら、満面の笑みでサルトは答える。

「うん、苦労したなあ。カボチャってレパートリー少なくて。スープだろ、煮付けだろ、カボチャサラダに焼きカボチャのソイソース炒め、パンプキンパイにカボチャご飯。あ、カボチャのおひたしも作ってたっけ」

答えになっていない。

「あり得ねえ、絶対食えたモンじゃねえ。特におひたし」
「うん、だから食え」

サルトは微笑むばかりであった。
返す言葉を失い、悔しげにアギは弟を睨み付ける。

「うう、くっそ。わあーったよ。カボチャは食ってやる。ただしアジを食ってからだ！ アジを出せい、このっ！」
「あ、そう？」

にんまり。

「ヒッ！」

今までの笑顔を越えた笑顔に、正直にも兄はビクツと反応した。

（な、何だ、あの罨にかけた狸をこれから煮込んで食っちゃまおう的、日本昔話の老婆の微笑みは）

たとえばいまいち混乱気味な兄。
兄のそんな様子を知って知らずか、相変わらず不気味な笑みをた

たえて、サルトは一皿前に出した。

「はい」

「……？ スープ、じゃん。カボチャの」

「アジだよ」

「どこが？」

「中が」

ポク、ポク、チーン。

アギは、言葉の意味を理解するのに、三秒かった。

(……………中?)

これはカボチャスープである。故に、底など見えはしない。つまり、何が入っていてもおかしくは、無い。

「まさか……」

「食え、せっかく用意してやったアジだぞ？」

「うあ、ア、アジ？」

すでにビビりまくりである。

半ば脅迫に近い形で、おそろおそろ兄は箸を手にとると、スープの中に突っ込んだ。すると、案の定、何かに箸が当たる。イヤな予感がしつつも、それを引っぱり出した。

ドゥロ……

と、カボチャまみれのアジが現れた。

アジは仲間になりたいようだ。勇者アギタンス、どうする？

a・食う b・食う c・ガバツと食う

「……………ゴメンナサイ」

「何が？ 冷めないうちに食べよな」

「スイマセン。お茶くらい自分で淹れますんで」

「さあ、どうぞ」

「あの、これはちょっと……」

「さあ」

「……………ハイ」

その夜、アジは胃酸の海を泳いだ。

クリスマス編

『HOHOHO！　メリークリスマス！』

テレビで赤服のひげ面じいさんが、何事かわめいていた。

そんなくだらない特番を、茶をすすりながら、こたつでミカンをむさぼる。

これが、ジール家のクリスマスである。

「ただいまー」

「お帰り、サルト」

リビングのドアを開けると、母である椎奈が一応声をかけるが、振り向きもしない。

「おかえひー」

これは長兄、アギタンス。ミカンをほおばりながら言ったので、言語になっていない。

サルトは鞆を部屋の角に放り投げると、そそくさどこたつに潜り込んだ。

「なに、兄貴。今日帰んの、早くない？」

「有給使った。クリスマスまで働いてられっか」

「うわ、もったいな。彼女と過ごすならともかく、家族とミカン食うために会社さぼったのかよ」

「うるへー。俺様につり合う女がないだけだ」

アギタンスは黙っていれば、いわゆるイケメンなのだが、いかん

せん本人の性格が悪い。さらにブラコンというおまけも付いてくるので、女がいても長く続いたためしがない。

まさにもつたいない男だ、とサルトは思う。

「うつ、寒い。もらうつよ」

凍えた両手をすりあわせて、サルトムスキーは勝手に兄の湯飲みを手に取る。

しかし、アギタンスは眉をひそめて、その手を掴んだ。

「おい、こら。茶くらい、自分で煎れろ」

「じゃあ聞くけど、このお茶、アギが自分で煎れた？」

「……すみません、俺の茶でよければいくらでもどうぞ」

案の定、アギタンスは母に茶を煎れさせたらしい。小さな勝利にほくほくしながら、サルトは茶をすすった。

サルトの横には、父が毛布にくるまりながら、一人爆睡している。平和だ。

「それにしても、なに、テレビ。他にやってないの？」

画面上では、子ども向けのクリスマス番組が繰り広げられている。ジール家にはいささか低年齢向きすぎると思われるのだが。

アギタンスがミカンの皮をゴミ箱に投げ入れながら、答えた。

「日本のクリスマスと正月なんて、くだらない特番しかやってねーよ。お前「彼氏とドキドキ　ネズミーパークデート大研究」なんて観たいのか？」

「いえ、結構デス」

仕方がない。サルトがテレビを眺めると、ちょうどサンタが少年の家に不法侵入している所だった。

『うわあ、サンタさん。また来てくれたんだ!』

画面上の少年は、ベッドから飛び起きると、開口一番にそう言った。

『ホッホ、わしが嘘をついたことがあったかね』

『でも去年、欲しいものと違ったよ。「ゲームボーイ」が欲しかったのに、あったのは「ゲイボーイ」だった』

サンタは絶句した。

ジール家も、絶句した。

「……なによ、この話。最近の子ども番組はこんなシュールなの」

「そりゃ、最近の子どもはひねてるから。なあ、サルト?」

「なんでこっち見て言うんだよ」

兄はにやりと笑うばかりで、何も返さなかった。

少しムツとしたが、ここでつかかるのも馬鹿らしい。会話の流れを変えようと、サルトが無理矢理口を開く。

「そっぴやさ、子どもん時、すっげえ気になってたんだけどさ」

「何を?」

「いや、うちってオートロックなのに、サンタってどこから入って来たんだろって」

弟の台詞に、アギタンスは呆れたように返す。

「お前、サンタだぞ。夢とおとぎ話の住人だぞ。そんな現実を当てはめるなよ」

「いや、でもさ。勝手にサンタだの泥棒だの血にまみれた殺人鬼だのが入って来たら、まずいじゃん。防犯的に」

「やな子どもだな、お前」

「で、父上に聞いてみたんだ」

アギは珍しく、一瞬ポカンとした表情を見せた。

「な、親父殿にか！ 人選間違ってるぞ、当時のお前！」

基本的に他人に興味が無い上に、常識というものを知らない父は、この家の中で最も相談に向かない人種であった。

その父はというと、今も横でのうのうといびきをかいている。

この人の遺伝子が受け継がれているのか、とサルトは少し泣きそうになった。

「ん。いや……まあ、他に誰もいなかったからさ。で」

（当時）

「お父さーん！」

「ん？」

「ねえねえ。サンタさんって、実はお父さんの愛人なんですよ？」

自信満々に目を輝かせて言う息子を見て、父は黙るしかなかった。

「合鍵持ってるから、おうち入れるんだよね、ね？ 防犯システムのエラーとかじゃないよね？」

「？ ああ、モニカのことか」

父は得心がいったように頷いた。

「やっぱりいるの、サンタさん！」

「サンタ」モニカという女のことだろう。金曜に家に来るから、お前にも会わせてやる」

「ホント？ お父さん大好き！」

（現代）

「ぐあい、たたたただっ？！ な、なんだ、どうし ！」

「黙れこのスケベ男！ 一体何人愛人抱えていやがった！」

起きた途端、いきなり妻にエビ反り固めをされていた父は、パニックに陥っていた。

「え、いつの？」

ちなみに母は知らないが、父の歴代の愛人たちはすでに三桁を超えている。もちろん、同時に複数の女を抱えることも珍しくない。

「……貴様、殺す！」

母の腕に、並々ならぬ力がかけられた。

「ぎゃあああああ——————っつ！」

「あーあ」

「平和だな」

これもまたジール家のクリスマスかと、子ども達は一晩中、組んず解れつの夫婦プロレスを眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8446j/>

± F 1 5

2010年10月8日21時46分発行